

かなは一字も覚えられなかった脳障害児が、漢字はどんどん

昭和四十九年七月、私は、四歳半になる脳障害児について相談を受けました。その子供は、一歳半の時、ダンプカーにはねられて、頭蓋骨陥没という瀕死の重傷を負い、以来、心身障害児となったものです。

その方面のあらゆる施設や病院を回ったが、どこでも回復不可能という烙印を捺され、家庭で暗中模索の指導をしていたとのこと。また、前の年から、かな書きによる本人の名前が読めるようにと、指導して一年になるが、まだ一文字も読めるようにならないこと。……などの話を聞きました。

私は、「毎日、漢字を教えること」の意義と方法について、両親に説明してやりました。その方法を一口に言いますと、毎日、一枚の漢字カードを十五回、一回におよそ十秒間かけて、カードを見せながら読んでやる、というものです。一日の学習時間は、わずか延べ二分半に過ぎません。

さて、それから一週間後、その父親から送られて来た手紙には、「毎日一字ずつ覚えて、今はどの字も間違わずに読めるようになった」こと。

「一年かかってもかなが一文字も覚えられなかった時は悲嘆のどん底にあったが、今は回復の希望が持てるようになった」ことなどが、こまごまと書かれていました。

一年半後の手紙には、「今までに覚えた漢字が三〇〇字。その上、かなも濁音、半濁音を含めて全部覚えた」とありました。今、小学校で、六年生が一年間に学習する漢字は一九〇字です。しかも、習得できる漢字数は、学級平均せいぜい一三〇字というところです。

つまり、正常の脳を持った子供でも、五、六年生の二年間に三百字の漢字を覚えることは大変なことなのです。それに比べて、四歳半の脳障害児が一年半の間に、漢字とかなを合わせて三〇〇字も覚えたということは、何とすばらしいことではありませんか。